魔法の宿題　プロジェクト　活動報告書

報告者氏名：赤嶺太亮　　所属：沖縄県立那覇特別支援学校　　記録日：平成 28 年２月 10 日

キーワード：重度重複障害　コミュニケーション　アセスメント

【対象児の情報】

○学年：小学部６年生　男児 A

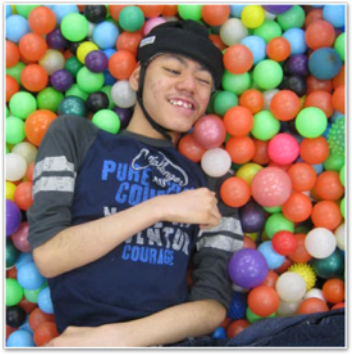
○障害と困難の内容

■知的障障害

◎重度重複障害

■肢体不自由

■視覚障害



対象児　A さん

・脳性まひによる四肢の機能障害

・視覚障害があり、光を少し感じている様子がうかがえる

・自己刺激の一つか、唇をブーっと鳴らしたり、両肩に指先でカリカリと触れる動きがある。また、バギーの背もたれのカバーを指先でカリカリとやぶろうとする動きがある。

・要求や拒否といった、自分からの表出がなかなか見られず教師が対象児の気持ちを推し量りながら関わっている。

定位反応	◎　聴覚刺激に耳をすませたような表情
探索反応	○　好きな刺激が止まると「ん？」というような表情をすることがある
快・不快	○　パトカーのサイレンの音や男性の低い声に笑顔や「ウィ～」と声を出して喜ぶ。手のひらが過敏で、苦手なものに触れると怒ったような声や不快な表情をする
要求・拒否	―
注意喚起	―
有意語	―

◎再現性有り客観的な説明が可能　○主観的には OK、実態の共有には課題　△芽生え、不安定　―できない ？

【活動目的】

○当初のねらい

要求や拒否を、発声や表情、身体の動きなどで伝えることができる。

○実施期間：平成 27 年５月～

○実施者：赤嶺太亮

○実施者と対象児の関係：学級担任

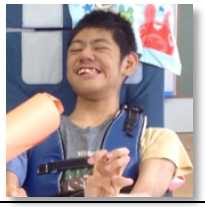
【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

・快、不快の表情や発声は見られるが、そこで教師からの働きかけを止めるとすぐに無表情になり自己刺激（唇でブーと音を出す、両肩を指先でカリカリと触れる）を始めることが多い。要求や拒否といった自分からの表出が見られず、教師が対象児の気持ちを推し量りながら関わっている。

好きな刺激で

笑顔や発声



刺激をやめると

無表情

○活動の具体的内容

取り組み①　好きと思われる刺激や苦手と思われる刺激など、様々な刺激を提示して要求のサインと捉えられそうな微細な反応(表情や発声、右手や左手の動きなど)が身体のどこに表れるかを探る。活動の様子を iPad で動画撮影（写真 1）及びアプリ「Numbers」で作成した記録表（写真 2）を用いて分析する。

【観察のポイント】

1「刺激が提示される前」 2「刺激が提示されているとき」 3「刺激が中断されたとき」
4「刺激が再開されたとき」

【観察の留意点】

- 対象児が刺激を受容しやすい静かな環境設定
- 教師の言葉かけも対象児にとって刺激の一つになると考えられる。観察時はなるべく言葉かけを減らして、対象児の反応を観る姿勢を心がける

写真１　iPad で刺激「ライオンの鳴き声」に喜ぶ様子

		6月25日	
刺激	状況	表情	左手の動き
ドライヤーの音	刺激の提示前	無表情	机の淵を指先で触れる
	刺激を与える	笑顔	力が入りその勢いで肘をグッと曲げ左肩を触わる
	刺激を止める	唇を「ブー」っと鳴らしている	指先で左肩を強く触わる
	じっと待つ	唇を「ブー」っと鳴らしている	指先で左肩を強く触わる
	刺激を再提示	笑顔	グッと力が入り指先で左肩を強く触わる

写真２　Numbers の記録表の一部

取り組み②　取り組み①で捉えられた要求のサインと捉えられそうな反応「唇ブー」をもとにして「自分の行動が周囲の大人や物の反応を引き出していく」という気づきや楽しさを積み重ねることで、要求のサインを定着できるようにする。

取り組み③　片方の端末を保護者に渡して「Numbers」のデータ、写真や動画を共有する（写真３）。対象児の新しく捉えられた実態や引き出された要求や注意喚起の動きが、今後の「家庭生活にどのようにして繋げられるのか」を保護者と一緒に検討する。

写真３　取り組み③のイメージ図

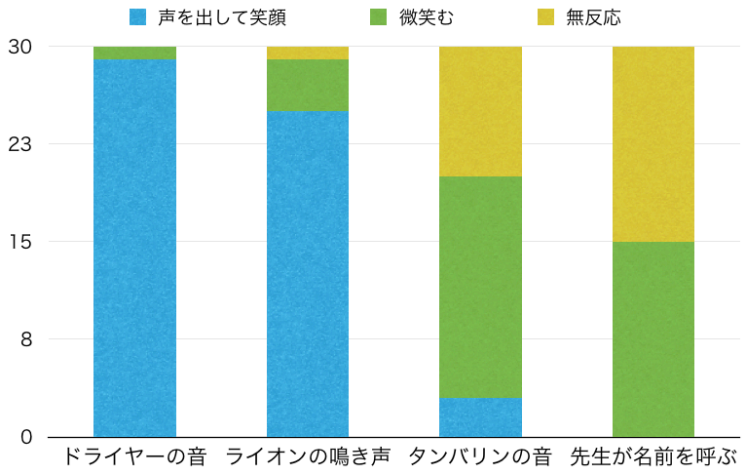
○対象児の事後の変化

取り組み①について

1．刺激に対する快の反応について

１回の授業で同じ刺激を10回ずつ提示。対象児の快の反応が出やすいと思われる表情に注目した。刺激が提示されているときの対象児の表情について３回の動画記録と記録表をもとに分析した（グラフ１）。１回の刺激提示に複数の表出が見られたもの（無反応のあとに→微笑む）ついては、最初に見られた表出を分析の対象とした。

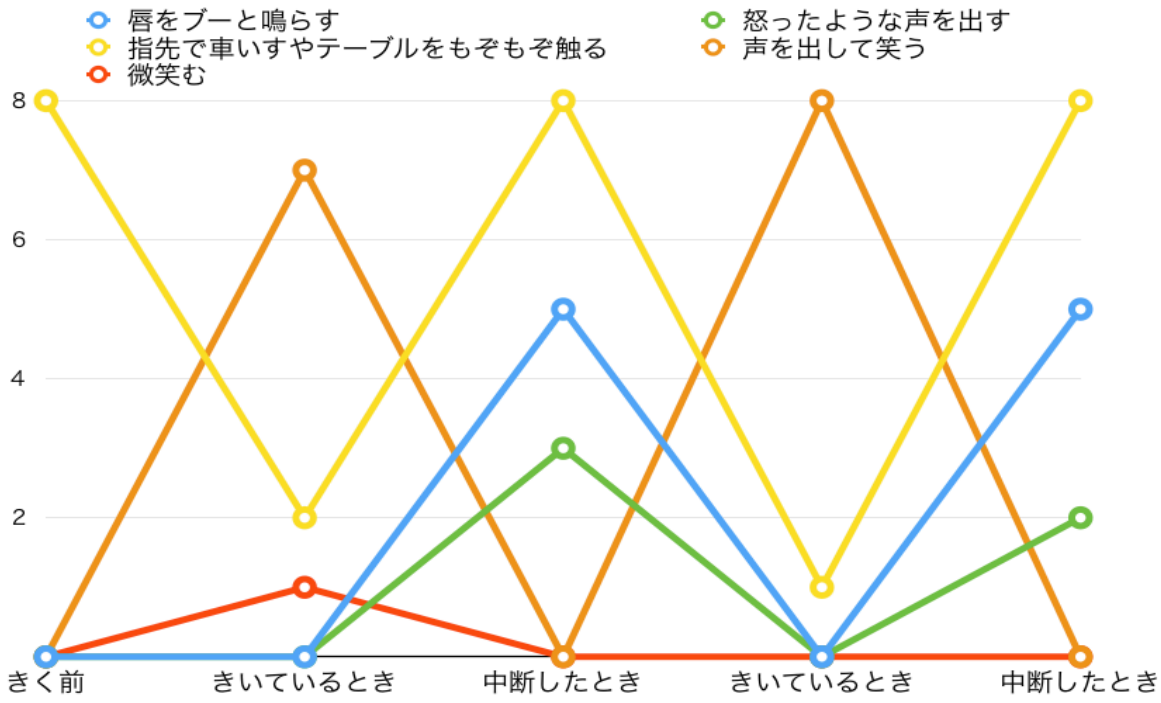
・提示される刺激によって、笑顔や無反応（おそらく聴いてはいるが）など表出の違いがはっきりしていた。
・対象児にとって好きと思われる刺激（ドライヤーの音、ライオンの鳴き声）と好きでもないけど嫌いでもない刺激？（タンバリンの音など）があることがわかった。



グラフ１　刺激が提示されているときの表情について

2.「ドライヤーの音が中断されたとき」の要求のサインと捉えられそうな反応について

好きな刺激と思われる「ドライヤーの音」をきく前をベースラインとして「きく前→きいているとき（15秒）→中断（15 秒）→きいているとき（15 秒）→中断（15 秒)」を１試行として８回行い「ドライヤーの音」が中断されたときの要求のサインと捉えられそうな表情や身体の動きについて分析した（グラフ２)。



グラフ２　「ドライヤーの音」が中断されたときの表出について

M 型（オレンジのグラフ）：声を出して笑う

ドライヤーの音を聴いているときの笑顔や発声の回数を計測すると、M 型のグラフとなった。この表出は、今体験していることへの反応である可能性が高いと考えている。

W 型（黄色のグラフ）：指先で車いすやテーブルをもぞもぞ触る

指先で車いすやテーブルをもぞもぞ触る表出の回数を計測したものである。この表出は、自己刺激と考えていた対象児の動きで、すでにドライヤーの音をきく前から見られ、きいているときには減っている。この表出は、対象児が刺激に注意を向けている定位反応を見つけるときの指標の一つであると考えている。

N型（青色のグラフ）：唇をブーと鳴らす

唇をブーと鳴らす表出の回数。W 型のように自己刺激的な表出とも考えられるが、注目はベースライン。きく前には見られず、中断に対してのみ見られる反応であった。刺激が中断された時にだけ見られる反応であるのであれば、「唇をブー」は「要求のサイン」の基になる表出なのではないかと考えた（写真４、５）。

写真４

「ドライヤーの音」
が中断・・・

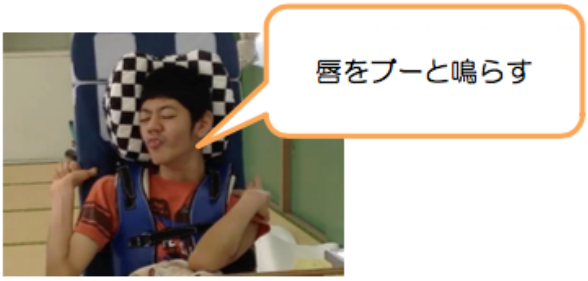


写真５

取り組み②について

取り組み①から「要求の元になる反応」として「唇ブー」があることがわかった。取り組み②では、取り組み①で分かった対象児の好きな様々な刺激と「唇ブー」を使って「刺激を中断→対象児が唇ブー→期待通りの好きな刺激を再提示」を繰り返し行うことで「唇をブーとすると先生たちが応えてくれる、楽しいことが起こる」という気づきや楽しさを対象児が感じられるようにした。

- 刺激を中断後、対象児が唇をブーとするまでの時間が次第に短くなっていった。また、「唇をブー」の要求のサインが個別学習だけでなく、その他の学校生活の様々な場面（朝の会で手遊びが終わると唇をブー、休み時間に聴いていた曲が終わり別の曲に変わると唇をブー）で要求すること見られるようになった。
- 要求のサイン「唇をブー」のあと、期待したものと違う刺激を提示してみたりしながら「おや？」「なんで？」「もっとやりたいのに？」からくる対象児の様々な反応を引き出せるようにした。好きな刺激を中断したり、期待した刺激とは違う刺激が提示されたりすると「机をドンドン叩く（写真６）」「次を期待したように微笑む（写真７）」「“ウー！”と声を出して訴える」 など、「唇ブー」以外にも自発的な働きかけの芽生えが見られるようになった。

写真６　机をドンドン叩いて訴える対象児

写真７　次の刺激を期待して笑う対象児

取り組み③について

対象児が楽しんだり要求したりしている様子の写真や動画を共有することで「対象児が自分から外界に働きかけようとしている」ことを共通確認できた。保護者が、より対象児の反応を細かく観察してくれるようになった。

【保護者からの感想として】

・お家でも好きなテレビ CM が終わったらブーブーすることが増えました。
・朝、教室に入るまでは静かだったのに、教室に入ると唇でブーブー言ってるね。何かしてほしいのだと思います。
・A 君が自分から周りに働きかけようとしていることに私も気づきました。

【報告者の気づきとエビデンス】

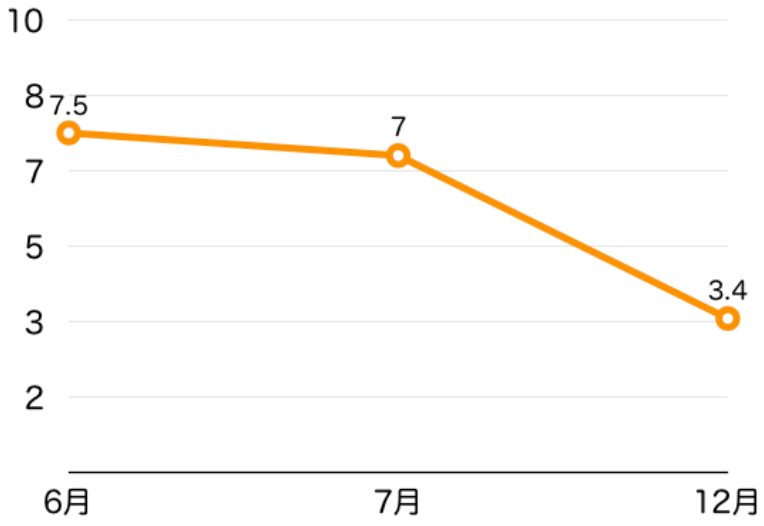
〇主観的気づき

・学校生活の様々な場面で「唇ブー」で要求すること見られるようになった。ベースラインを設けた観察方法、動画やデータで比較してみることで「要求の元になる反応」として「唇ブー」があることがわかり、「対象児が唇ブー→期待通りの好きな刺激を再提示」を繰り返し行うことで「唇をブーとすると先生たちが応えてくれる」という因果関係を理解した結果なのではないか。
・好きな刺激を中断したり、期待した刺激とは違う刺激が提示されたりすると「唇ブー」以外にも自発的な働きかけの芽生えが見られるようになった。

〇エビデンス

1．要求のサイン「唇をブー」の定着について

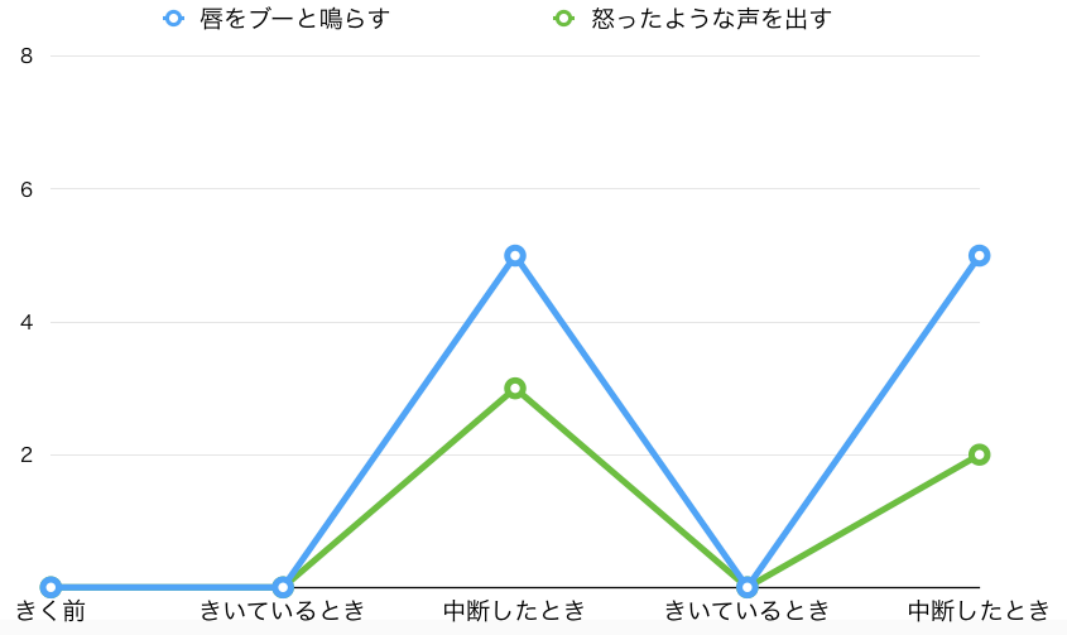
好きな刺激中断後、「唇ブー」までの時間が短くなった（グラフ３）。対象児が「唇をブーとすると先生たちが応えてくれる、楽しいことが起こる」という因果関係を理解した結果が現れていると考える。



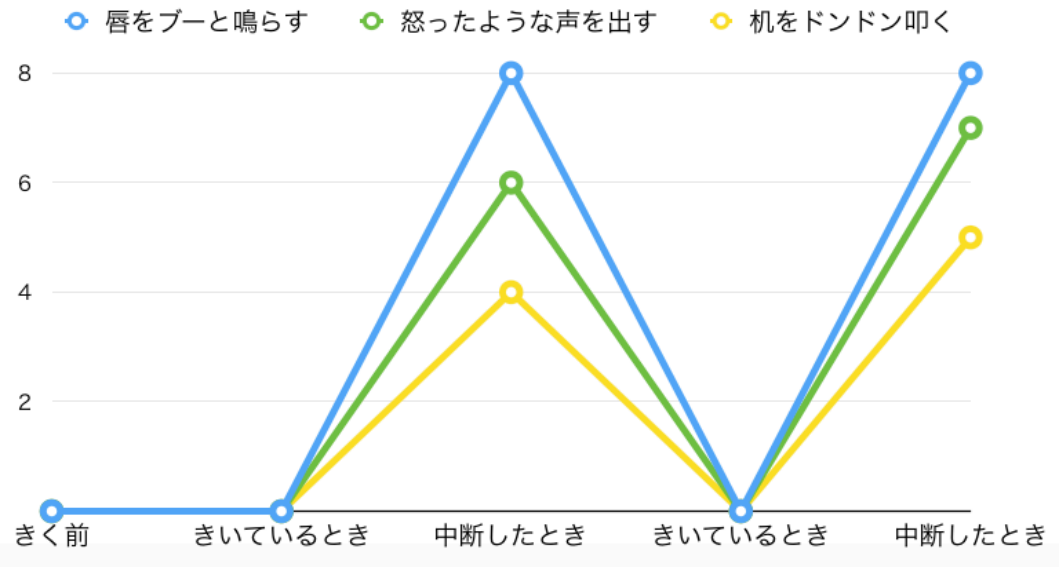
グラフ３　刺激中断後の「唇をブー」までの時間の変化

２．自発的な働きかけの芽生えについて

自発的な働きかけの芽生えと思われるような反応が様々な形で見られるようになった。グラフ４は、取り組み①で行った好きなドライヤーの音をきく前から中断を繰り返したときの表出についてＮ型だけ抽出した結果である。また、その比較を 12 月にも同様に行った。グラフ５は、その結果をＮ型だけ抽出したものである。



グラフ４　取り組み当初「ドライヤーの音」が中断されたときの表出について



グラフ４　１２月の「ドライヤーの音」が中断されたときの表出について

自発的な働きかけの芽生え（要求のサイン）と見られるようなＮ型のグラフとして 12 月には「机をトントン叩く」などの様子がみられるようになった。また、取り組み当初と比較して中断に対して「唇をブーと鳴らす」「怒ったような声を出す」の回数が増加していることがわかる。他にも、エピソードとして、好きな刺激が中断されると次の刺激を期待してかニコッと笑ったり、要求のサインが出た時にわざと違う刺激を提示すると「ウー！」と怒ったような声や表情をしたりなど、様々な反応が見られるようになってきている。

〇考察

１．「本当にそうなの？」という問いかけ

今回の実践は、対象児の様子を「本当にそうなの？」という視点で捉え直す所からスタートした。重度重複障害のある子どもたちの行動観察は、様子を見たりエピソードで記述したりするだけでは、なかなか情報が得られにくい難しさがある。しかし、いくつかのテクニックをおさえれば、観察する条件を整える、動画やデータで比較してみるなどシンプルな方法で客観的にかつ新しい子どもの様子が見えてくることに気づかされた。

２．ベースラインや刺激提示、中断など観察の手法について

ベースラインを設けて比べながら観察するこの方法は、できるだけ客観的で無理のない解釈ができる観察方法であった。また、M、W、N 型など対象児の様子を捉え直すことができた。１事例ではあるが、これは要求のサインを育てるためのアセスメントの方法として有効なのでは、と感じた。私たちが解釈していた子どもたちの行動の中に本人の力や表現が示されている可能性があり、この観察方法でその子どもたちの表現を捉え直すことができるのでは考えている。

【今後の見通し】

１．学習記録としての iPad の有効性

動画撮影等はパソコンやデジカメ等でもできるが、より手軽に、簡単にといった点は iPad ならではの良さであった。

２．指先や手を使った探索行動の分析とその動きを引き出していきたい

今回の実践で行った観察方法（ベースラインを設けて比べていく）を用いて、指先や手の動きに焦点を当てて分析することで、これまで気づかなかった対象児の表出を捉え直すことができるのでは。

３．家庭との連携について

外界に働きかけようとする対象児の意欲の変容を、学校だけでなく家庭も含めた今後の日常生活にどのようにして繋げられるか、保護者と検討する必要がある。